



高等学校国際文化科における『地域研究』の実践

古藪, 省二

(Citation)

兵庫地理, 48:47-49

(Issue Date)

2003-03-31

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90002445>



高等学校国際文化科における『地域研究』の実践

古藪 省二

1. 授業の概要

兵庫県立芦屋南高校では国際文化科の専門科目として、2年次に2単位で「地域研究」を実施している。この授業では、世界の諸地域における生活・文化、社会問題などに関し、生徒自らが研究テーマを設定し研究調査を行っている。研究調査は4人程度のグループ単位で、その内容については研究発表を行わせている。

研究対象地域としては東南アジア、南アジア、ラテンアメリカに限定している。これは日本において比較的情報の多い欧米の英語圏以外の地域をあえて選び、それらの地域についての理解を深めていくことが目的である。

この授業のねらいとしてはさまざまな地域を研究することで、異文化理解への動機づけを行い、また研究発表を行うことでコミュニケーション能力を高めることをねらいと考えている。

2. 授業の流れ

授業のおおまかな流れは次の通りである。

(1) 1学期

ラテンアメリカについての研究調査

4月 ガイダンス、班決め、研究テーマ選
定、研究調査開始

5月 研究調査

6月 研究発表（研究レポート作成）

7月 //

(2) 2学期

東南アジアについての研究調査

9月 班決め、研究テーマ選定、研究調査
開始

10月 研究調査、外部講師による講演会

11月 研究発表（研究レポート作成）

12月 //

(3) 3学期

ラテンアメリカ・東南アジア以外の地域について、個人研究のレポート作成

1月 研究調査

2月 研究調査、外部講師による講演会

3. 調査研究、研究発表について

授業中においては校内の図書室、コンピュータ室、近隣の市立図書館などを使用し、必要に応じて放課後や休日を利用した校外調査も行っている。意欲的な生徒は休日にも積極的に活用し、近隣の関連施設や日本に在住する研究対象国の方々に聞き取り調査を行ったりする者もいる。しかし、部活動や他の課外活動、学習活動との兼ね合いもあり、班員全員による活動に時間を費やすことは非常に困難である場合が多いのが現状である。現在は学期ごとに成績をつけなければならないことから、1学期から研究発表を行うが、



写真1 公開授業風景（その1）

特に最初の研究発表は文化祭の時期とも重なり生徒たちにとって時間の確保が大きな負担となっている。

発表前にはリハーサルを行って教員の指導を受ける。そうして完成した研究発表を授業で披露するのである。研究発表は20分程度としている。発表を見ている他の生徒たちの反応が、発表する生徒たちを最も緊張させるように思われる。他の授業では考査等で教員による評価を受けるが、この授業では聞き手の生徒たちの反応が最大の評価となる。準備の段階から教員に理解させることよりも、他の生徒たちにどう理解させるかということに主眼をおいて教員も指導を行う。調べたことを全部伝えようとして内容が煮詰まったりすることはよくあることで、教育実習生への指導のような部分も出てきたりする。そして生徒たちは人に何かを伝えることの難しさを実感しながら、その能力を身につけていくのである。

研究発表が終了すると生徒からの質疑と応答、教員からの講評が行われ、生徒たちの感想文作成で授業が終了する。なお近年の研究テーマは第1表の通りである。

第1表 最近の主な研究テーマ

ブラジルのストリートチルドレン
東南アジアの教育制度
イースター島
フィリピンとバナナ
ジャマイカとレゲエ
東南アジアのトイレ
コロンビアと麻薬
カンボジアと地雷
リオのカーニバル
スパイスと民族料理

4. 評価について

研究発表を中心に、研究レポート等で評価

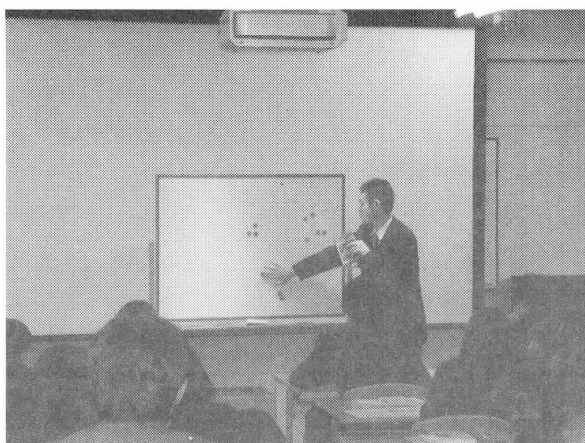


写真2 公開授業風景（その2）

を行っている。

5. 成果と課題

(1) 調査研究への充実感

授業の最初にガイダンスを行うと、最初の生徒たちの反応はまず考査を行わないことへの安堵感が見られる。しかし授業が進んでいくと、調査研究の難しさから考査がある方が楽だといった声も聞こえてくる。しかしうまく研究発表を行い、納得のいく研究を行った生徒は他の授業では味わえない充実感を感じている。高校3年間の授業で最も充実感を感じたという生徒もおり、こういった点はこの授業における大きな成果といえる。

(2) 異文化理解への動機づけ

この授業ではさすがに現地でのフィールドワークまでは実施できないので、研究調査は日本での情報が中心となる。したがってこの授業で研究調査したからといっても、その地域のことを理解したとは当然いえない。しかし卒業生から、この授業がきっかけとなって興味関心を深め、大学等でさらに深い研究を行ったというような話を聞くこともあり、この授業における成果を感じている。

(3) 生徒の自主性と教師の指導性（「総合的な学習の時間」に向けて）

本校は、平成15年度より国際高校へ学校改

編される。そして同時にスタートする「総合的な学習の時間」にこの「地域研究」を発展させ、改善すべき所は改善し新たな科目として実施する予定である。

生徒が自ら課題を見つけ、自ら学び、生きる力を養っていこうとすることは非常に重要なことであるが、なかなか困難なことでもある。生徒の自主性と教師の指導性の問題は教育における普遍的な課題であるが、「地域研究」のような授業を担当し改めてその難しさを実感している。意欲を見せない生徒に対して生徒の自主性を尊重した上でどのような指導を行い、意欲を引き出していくのか。今後もしさらに考えていかなくてはならない大きな課題である。

(4) インターネットの活用方法

最後にインターネットの問題を取り上げた

い。近年のインターネットの普及で「地域研究」の授業もあっという間にインターネットによる研究調査が主流となった。時代の流れと言ってしまうとそれまでだが、明らかに文献による研究調査が少なくなった。インターネットは便利であるが、その便利さのみに依存して、研究調査の内容が浅くなっている傾向が近年著しく見られるようになった。もちろんインターネットを使っても内容のある素晴らしい研究調査を行う生徒もいる。したがってインターネットを否定するのではなく、インターネットからの情報をいかに活用するか、いかに取捨選択するかといったいわゆる「情報リテラシー」の部分が大きな課題となっている。

(ふるやぶ しょうじ・県立芦屋南高校)